

# 手仕事の饗宴

麻の地を覆いつくすような菱刺しの文様にじっと目を凝らしていると、刺し手の微かな息遣いまでもが聞こえてきそうな、天羽やよい作、南部菱刺しの帯「枯葎<sup>かれむら</sup>」です。東京生まれの天羽さんは、一九七五年、二〇代の後半に移り住んだ八戸の町の本屋さんで一冊の本に出合います。

東北地方の民具や野良着の収集家として知られる在野の民俗学者、田中忠三郎氏の『南部つづれ菱刺し模様集』。南部菱刺しとは、江戸時代南部藩の所領だった青森県の東部に住む、農家の女性たちによって脈々と受け継がれた手仕事のこと。長年にわたり農家を訪ね収集した古着に菱刺しされた、夥しい数の模様を記録した貴重な資料です。

本屋の棚に並んだ一冊の高価な本は、一瞬にして天羽さんを魅了してしまいます。以来、導かれるように菱刺しを始めた天羽さんにとって、師と仰ぐのはこの本だけ。完全な独学でした。「横一線に針を運んでいくうちに、布の上に少しずつ模様が見えてきてゆっくりゆっくり完成の形に育っていく。刺し手はその成長を見続ける。刺している間の時間は流れ去ることなく布の上に確かなものとして定着していく。」(二〇一七年に書かれた、天羽さん自筆の文章から)。

雑誌の誌面で拝見するお姿や、取材に応じて言葉を選びながら語る天羽さんの一言一言は、深く腑に落とす説得力を持ち、菱刺しに向かう天羽さんの姿勢や、心の奥底に秘めた静かな激しさを勝手に想像してしまいました。

ログウッドで染めた灰色、もう一色の薄茶は煎茶で染められています。この淡い二色の木綿糸で刺された精緻な文様には、たおやかな力強さがありました。天羽さんの「枯葎」に合わせるきもの。意外なことですが、「やわな」きものでは到底大刀打ちできないのです。ふと浮かんだのが、麻の葉の結城。真綿から手でつむいだ糸を、手で括って染め、地機で織るといふ、すべての作業は人の手によるもの。こっくりした濃い茶に亀甲縞が描く麻の葉の文様と、驚くほど軽くふんわりした感触の結城紬が、控えめな底力を発揮して、天羽さんの菱刺しとあじわい深い取り合わせになりました。

撮影：浅井佳代子／ヘアとメイクアップ：高野雅子／着つけ：石山美津江／着る人：仙道敦子



## クリスマスカラーを添えて

南部菱刺しの帯に、濃茶地の麻の葉の結城。灰白色の帯揚げに黒紅色の高麗組の紐を合わせて「ちよつと地味？」と疑問符が。二月は、クリスマスや新年を前に浮き浮きと心躍る季節。少し華やきを添えようかと考えたのが、スマック織のラグ。帯締めの色目に重なる西色や、藍の濃淡をはじめとする色とりどりの糸で織り出される文様は、様々な寓意を含む動物や植物、



道具など。デザイン力も構成力も秀逸で、何よりも楽しさに溢れている。

スマック織の敷物に座ったきもの姿。すべてのまとめ役となる西染めの古裂風呂敷が、なかなかいい仕事をしてくれる。

結城紬 濃茶地に麻の葉の文様

帯揚げ 縮緬 淡い灰白色無地 (三浦清商店)

帯締め 高麗組 黒紅色無地 (道明)

天羽やよい作 南部菱刺し「枯葎」 (丹後きものそん)

私物

せんのぞのぞ、女優。一九六九年愛知県生れ。八二年「判決—生きる」で女優デビュー。以降、テレビドラマや映画、舞台CMなど幅広く活躍。八三年に出演した映画「白蛇抄」で、第八回くまもと映画祭新人女優賞、日本アカデミー賞新人俳優賞を受賞。九五年に出演したCMを最後に芸能活動を休止していたが、二〇一八年、三年ぶりにドラマ「この世界の片隅に」で女優復帰を果たした。一九九年、NHK連続テレビ小説「なつぞら」に出演。

せいのみえりこ、文筆家。独自の美意識に貫かれた、個性的なきもの取合せは、きもの好きから、多くの支持を受ける。好奇心の赴くまま、雑誌の企画、構成、執筆など、ジャンルにこだわらず、取材の対象を広げている。著書に「子犬のカイがやって来て」(幻冬舎刊)、本誌連載をまとめた「折にふれて」きもの四季(文化出版局刊)など。最新刊は、咲き定まりて 市川雷蔵を旅する(集英社インターナショナル刊)。

